（7 月 30 日）「ローマの信徒への手紙 13：1～7」
すべての人々に対して自分の義務を果たしなさい。貢を納めるべき人には貢を納め、税を納めるべき人には税を納め、恐るべき人は恐れ、敬うべき人は敬いなさい。
（ローマの信徒への手紙 13 章 7 節）

・今日の箇所は、とても解釈が難しいです。「支配者」という言葉を聞くと、大統領、総理大臣、政治家などが思い出されます。それらの人がすべて「神によって立てられた」と書かれたら、首をひねってしまいます。
・また教会においてもそうです。「上に立つ権力」といえば、主教や牧師、教会委員などが思い起こされます。しかしそれらの人が自分のことを「神によって立てられた」と悪い意味で自負してしまえば、教会は間違った方向に進んでしまうでしょう。
・聖公会の祈祷書の中には、「国会、地方議員のため」、「行政のため」というお祈りが載せられています。権力を持つ人にただ刃向かうのではなく、よき方向に導かれるように祈っていくことが大切なのかもしれません。

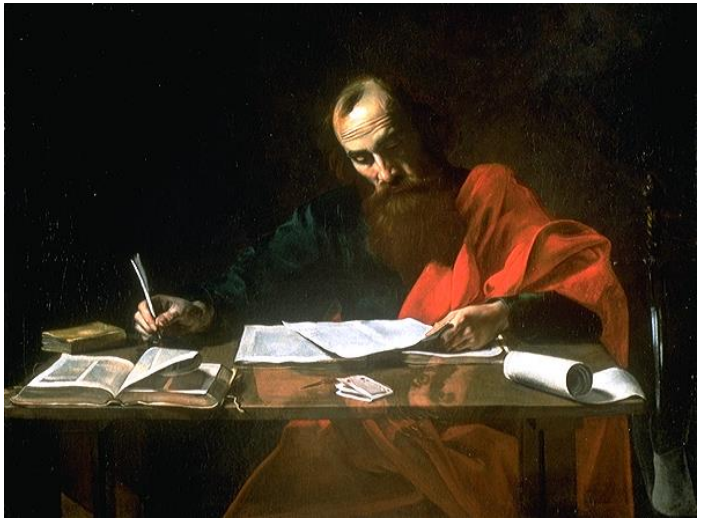
（7 月 31 日）「ローマの信徒への手紙 13：8～10」
愛は隣人に悪を行いません。だから、愛は律法を全うするものです。
（ローマの信徒への手紙 13 章 10 節）

・「互いに愛し合う」、その言葉はキリスト教徒にとってとても重いものです。聖書の中にも何度も出てくる愛という言葉は、日本に聖書が入ってきた当初、「御大切」と翻訳されたこともありました。
・隣にいる人を、とってもとっても大切にしなさい。これが、神さまがわたしたちに与えられた一番の掟です。そのことに、すべての律法が要約されていると、パウロは伝えます。しかしこれには、大切な前提があるのです。
・その前提とは、神さまがまずわたしたち一人一人をとってもとっても大切にされたということです。その「愛のシャワー」を浴び続けているから、わたしたちはその雫をとなりの人と分かち合うことができるのです。

2024 年 7 月

ローマの信徒への手紙　通　読

7 月



（7 月　1 日）「ローマの信徒への手紙 6：12～14」
なぜなら、罪は、もはや、あなたがたを支配することはないからです。あなたがたは律法の下ではなく、恵みの下にいるのです。
（ローマの信徒への手紙 6 章 14 節）

・キリストを身にまとったわたしたちは、恵みの下にいるという言葉。とてもうれしく感じます。わたしはキリスト教に出会う前、神さまという存在は「監視する」方なのだと思っていました。
・「こんなことしてたら神さまに怒られるよ」、「それじゃあ地獄に落ちちゃうよ」、そのような言葉に支配される中では、窮屈な生き方しかできないのかもしれません。しかしわたしたちには罪から解放され、恵みの中で生きることが許されているのです。
・だからわたしたちは、自分自身を神さまに献げることができるのです。自分を神さまの道具として用いてもらおうと、導かれるのです。まず神さまの恵みが与えられ、わたしたちは突き動かされるのです。

（7 月　2 日）「ローマの信徒への手紙 6：15～18」
では、どうなのか。わたしたちは、律法の下ではなく恵みの下にいるのだから、罪を犯してよいということでしょうか。決してそうではない。
（ローマの信徒への手紙 6 章 15 節）

・パウロが語る「信仰義認」に対して、このような批判があったようです。「信仰によって義とされるのであれば、良いおこないは必要ないということか。では何をしても良いということなのか」。
・日本の教育の現場は、この数十年間で大きく変わりました。昔は体罰や恫喝は当たり前。先生の言うことを守らないと、とてもひどい目に遭わされていました。そのようにして、人は成長すると信じられていました。
・今はその考え方とは違い、一人一人の個性を認め、良いところをほめ、受け入れることを大切にしています。厳しくされるから罪を犯さないのではなく、愛されていることを知ったから義に生きるのです。

（7 月　3 日）「ローマの信徒への手紙 6：19～23」
罪が支払う報酬は死です。しかし、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスによる永遠の命なのです。
（ローマの信徒への手紙 6 章 23 節）

・6 章の終わりに、神さまの賜物として与えられる永遠の命についての記述があります。神さまの奴隷となったわたしたちは、聖なる者となるための実を結び、永遠の命へと行きつくのです。
・ただ日本語の「奴隷」という言葉に、あまりいいイメージを持てない方もおられると思います。お葬式の中でもなくなった方を「僕（しもべ）」と呼びますが、奴隷も僕も、わたしたちは良い意味で捉えることは難しいです。
・しかし聖書時代の奴隷とは、債務の肩代わりとして労働をする、いわゆる職業奴隷でした。わたしたちはイエス様の十字架によって、罪を赦されました。そのことで神さまはわたしたちを奴隷として用いてくださいます。そしてその報酬は、永遠の命なのです。

（7 月 28 日）「ローマの信徒への手紙 12：1～8」
わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです。
（ローマの信徒への手紙 12 章 5 節）

・教会というところは、不思議な場所です。たとえば何かイベントをするとき、チラシを作る人、食事を用意する人、プログラムを考える人、司会をする人など、いつの間にか決まっていくことが多くあります。
・また新しく来られた方に寄り添う人、建築や修繕に長けている人、知らないうちにお花をいけてくれる人など、「雇用」しているわけではないのに、それぞれできることをされる方が多くおられます。
・これが、自分の賜物を生かし、聖なる生けるいけにえとして献げるということなのだと思います。文字にするととてもハードルが高いことですが、教会はそのようにしてお互いに支え合い、人々に仕え合っているのです。

（7 月 29 日）「ローマの信徒への手紙 12：9～21」
喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。
（ローマの信徒への手紙 12 章 15 節）

・「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く」、とても簡単なようで難しいことです。たとえばとなりの家の人が宝くじに当たったとき、少額だったら一緒に喜べますが、高額だったら妬んでしまうかもしれません。
・また普段あまり良く思っていない人が大きな失敗をして涙を流しているとき、「ざまあみろ」という感情は起きないでしょうか。わたしたちは表面上は「同情」していても、心の中では違う思いを持ってしまうことが多くあります。
・そのような偽りの愛をもたないように、歩みなさいとパウロは書きます。とは言っても、難しいことです。自分を迫害する人を祝福することは、とても大変です。しかし出来ない所は神さまにお委ねして、歩んでいければと思います。

（7 月 26 日）「ローマの信徒への手紙 11：25～32」

福音について言えば、イスラエル人は、あなたがたのために神に敵対していますが、神の選びについて言えば、先祖たちのお陰で神に愛されています。

（ローマの信徒への手紙 11 章 28 節）

・パウロは神さまの計画によれば、救いが全世界に広がった後にイスラエルが救われることになっていると書きます。これは旧約聖書の中で示された救いの順番と、まったく逆になっています。
・まさにイエス様が言われた、「後の者が先になり、先の者が後になる」という言葉が思い起こされます。ただここで心に留めておきたいのは、後になったからといって救いの道が閉ざされるのではないということです。
・幼稚園の運動会のかけっこのとき、ゴールで待つ先生たちは最後の子がやって来るまでいつまでも待ちます。時には観客席から大きな拍手や声援が響きます。神さまも最後の一人が救いの門を通るのを、いつまでも待っていてくださっているのです。

（7 月 27 日）「ローマの信徒への手紙 11：33～36」

すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン。

（ローマの信徒への手紙 11 章 36 節）

・わたしたちは日曜日になると、礼拝をします。その目的は何でしょうか。親しい友人に会うためでしょうか。ここち良いオルガンの音に耳を傾けたいからでしょうか。家にいると気まずいからでしょうか。
・パウロはここまで、議論を重ねてきました。ときには難解で、とても分かりづらい表現もありました。でもその根底にあるのが、今日の箇所の最後にある「神さまへの賛美」なのです。
・わたしたちにも経験があると思います。様々な出来事を振り返ったときに、神さまが幾度となく支え、導いてくださったということが。その神さまの憐れみを感じ、いつも神さまを賛美することができればと思います。

（7 月　4 日）「ローマの信徒への手紙 7：1～6」

わたしたちが肉に従って生きている間は、罪へ誘う欲情が律法によって五体の中に働き、死に至る実を結んでいました。

（ローマの信徒への手紙 7 章 5 節）

・パウロは、律法とは人が生きている間だけ支配するものだと説きます。こう言うと、「じゃあわたしたちが生きている間は、結局律法の管理下にあるのではないの？」と思ってしまうかもしれません。
・しかし、そうではないのです。神さまはイエス様を遣わし、わたしたちのために十字架へと向かわされました。そのことによってわたしたちの罪は贖われ、わたしたちは新しい命に生きることができるようになったのです。
・つまり、律法に支配されていた「古い自分」は死んだということなのです。ただ、「結婚した女は、夫の生存中は律法によって夫に結ばれているが、夫が死ねば、自分を夫に結び付けていた律法から解放される」という言葉には、首をかしげてしまいますが。

（7 月　5 日）「ローマの信徒への手紙 7：7～12」

こういうわけで、律法は聖なるものであり、掟も聖であり、正しく、そして善いものなのです。

（ローマの信徒への手紙 7 章 12 節）

・この箇所を読むと、創世記のアダムとエバの物語を思い出します。神さまに創造されたアダムとエバは、エデンの園で暮らしていました。彼らは二人とも裸でしたが、何も気にしていませんでした。
・ところが善悪の知識の木の実を食べた途端、彼らの目は開け、自分たちが裸であることに気づき、恥ずかしくなってしまったのです。善悪を知ることによって、自分の見にくい部分に気づかされたとも言えるのです。
・律法はわたしたちに、自分たちは罪深く、本来死に引き渡されざるを得ない存在であることを認識させます。「善いもの」であるからこそ、わたしたちの陰を明るみに引きずり出してしまうのです。

（7 月　6 日）「ローマの信徒への手紙 7：13～17」
そして、そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。
（ローマの信徒への手紙 7 章 17 節）

・朝起きて、「今日こそは悪いことをしないぞ。良くない思いも絶対持たないぞ」と決意しても、夜になって振り返ってみると悲しい思いをすることがしばしばです。心の中までずっと清くいられることなど、なかなか出来ないのです。
・性善説と性悪説という言葉があります。人は生まれながら善なのか、それとも悪なのか。自分のことを振り返ると、パウロが言うように心の中に罪が住みついているようにも思えてしまいます。
・しかし「どうせ自分は生まれながらにして悪い人間なのだから、何をしたって一緒さ」ということではありません。パウロが繰り返し言っているのは、人間がそのように罪深いにも関わらず、手を差し伸べて下さる方がいるということです。

（7 月　7 日）「ローマの信徒への手紙 7：18～25」
わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。
（ローマの信徒への手紙 7 章 19 節）

・イエス様の山上の説教の言葉の中に、「もし、右の手があなたをつまずかせるなら、切り取って捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に落ちない方がましである。（マタイによる福音書 5 章 30 節）」というものがあります。
・パウロの考えの根底には、「二元論」があるようです。今日の箇所であれば、肉は罪、心（霊）は善だと考えているようです。ただこれは、現在の身体の理解とは少し違ってくるかもしれません。
・わたしたちにも、心と体が伴わないという経験はあると思います。しかし聖餐式の中で、「思いと、言葉と行いによって、多くの罪を犯している」と懺悔しているわけですから、「肉」もわたしたちの大事な一部なのです。

（7 月 24 日）「ローマの信徒への手紙 11：11～16」
麦の初穂が聖なるものであれば、練り粉全体もそうであり、根が聖なるものであれば、枝もそうです。
（ローマの信徒への手紙 11 章 16 節）

・ここからパウロは、異邦人の救いについて語っていきます。ただすべての目を異邦人に向けるのではなく、ユダヤ人についても議論を続けます。パウロは一人のユダヤ人として、同胞も救いに導きたいのです。
・旧約聖書の中では、救いはまずユダヤ人に与えられ、そこから全世界へと広がっていくとされていました。しかしユダヤ人がつまずいた結果、救いは異邦人に向けられたとパウロは書きます。
・しかしその流れはユダヤ人が妬みを起こし、その過ちによってもたらされたものだというのです。パン種が小麦粉全体を大きく膨張させるように、ユダヤ人の失敗によって世界に救いが訪れたというのです。

（7 月 25 日）「ローマの信徒への手紙 11：17～24」
そのとおりです。ユダヤ人は、不信仰のために折り取られましたが、あなたは信仰によって立っています。思い上がってはなりません。むしろ恐れなさい。
（ローマの信徒への手紙 11 章 20 節）

・新約聖書をずっと読み続けていると、ファリサイ派や律法学者といったユダヤ人を悪と決めつけてしまうことがあります。パウロがいた時代の異邦人の中にも、そのような驕りを持つ人たちがいたようです。
・神さまは、ユダヤ人という枝を折られて、異邦人という枝を接ぎ木されたのだとパウロは書きます。しかし憐れみの神さまは、その折った枝さえもいつでも接ぎ木されるのです。同じように一度接ぎ木された枝も、いつ折られるかわかりません。
・わたしたちも、神さまの憐れみにより接ぎ木された枝です。その憐れみの上に、わたしたちは生かされていることを覚えましょう。「あの枝を早く折ってください！」などと願うのは、ちょっと違いますね。

（7 月 22 日）「ローマの信徒への手紙 11：1～4」
では、尋ねよう。神は御自分の民を退けられたのであろうか。決してそうではない。わたしもイスラエル人で、アブラハムの子孫であり、ベニヤミン族の者です。
（ローマの信徒への手紙 11 章 1 節）

・パウロは「神は御自分の民を退けられたのであろうか」と問いかけます。これまでの内容を思い返してみると、救いはユダヤ人から異邦人に移ったと考えることができるため、答えは「イエス」になりそうです。
・しかしパウロは「ノー」、つまりユダヤ人が完全に退けられたわけではないと書きます。このことは、とても重要なことです。わたしたちはときに、「白か黒か」をはっきりさせたいと願います。
・しかし神さまは、憐れみのお方です。何度も何度もチャンスを与えられます。ユダヤ人にも救いの道を残しておられるのです。わたしたちもまた神さまに背いたとしても、神さまは何度だって招いてくださるのです。

（7 月 23 日）「ローマの信徒への手紙 11：5～10」
もしそれが恵みによるとすれば、行いにはよりません。もしそうでなければ、恵みはもはや恵みではなくなります。
（ローマの信徒への手紙 11 章 6 節）

・「神さまの恵みによって生かされる」、わたしたちの間では、この言葉には違和感がないと思います。しかしユダヤ人はその歴史の中でずっと、そこには行いも伴わなければならないと考えてきました。
・様々な祭儀や律法などが定められ、安息日には違反している人がいないかどうか監視し、人々は「神さまの縛りの中で生きている」状態にあったのかもしれません。しかもそのことによっては、誰一人として神の前に正しい者となれなかったのです。
・本当に恵みの中に生きるとはどういうことか、それは自分を中心とした思いから解き放たれることなのではないでしょうか。ギュッと握りしめていた手を開き、神さまが差し出した手を握り返す。かたくなな心を捨てるのです。

（7 月　8 日）「ローマの信徒への手紙 8：1～8」
それは、肉ではなく霊に従って歩むわたしたちの内に、律法の要求が満たされるためでした。
（ローマの信徒への手紙 8 章 4 節）

・パウロはさらに、霊と肉を二元的に捉えて語ります。ただここで、「肉」をわたしたちの肉体と同じように考えてしまうと、自分を大切にしなくてもいいのだ、傷つけてもいいのだと勘違いしそうですが、それは違います。
・神さまはわたしたちを愛し、大切にしてくださいます。それは「霊」だけではなく、「肉」に対してもです。わたしたちの髪の毛一本さえもなくならないようにと、守って下さっているのです。
・「肉」という言葉を、たとえば「自分勝手な思い」や「神さまに背く心」と置き換えてみたらどうでしょう。そのことで、パウロの言う霊と肉との関係が少し理解できてくるような気がします。

（7 月　9 日）「ローマの信徒への手紙 8：9～11」
もし、イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてくださるでしょう。
（ローマの信徒への手紙 8 章 11 節）

・「神の霊があなたがたのうちに宿っている」、パウロのこの言葉は、わたしたちに喜びを与えます。たとえ肉体が汚れていても、神さまの霊がわたしたちの内にあり、わたしたちと共におられるのです。
・創世記の 2 章には、神さまが最初の人アダムを造られた様子が書かれています。神さまは土をこねて、人間の形を造られました。そしてその鼻から息を入れ、生きる者とされたのでした。
・旧約聖書が書かれたヘブライ語では、「息」と「霊」とは同じ言葉です。ですから神さまがわたしたちにも霊を注ぎ込み、その霊によってわたしたちは生かされているとも言えます。とてもうれしいことです。

（7 月 10 日）「ローマの信徒への手紙 8：12～17」
この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒になって証ししてくださいます。
（ローマの信徒への手紙 8 章 16 節）

・「霊によって体の仕業を絶つならば、あなたがたは生きます」というパウロの言葉が響きます。さて、キリスト教書店などで売っているキーホルダーの中に、「WWJD」という言葉が彫られた物があります。
・この文字は「What Would Jesus Do？」の略で、「もしイエス様だったら、どうするだろう？」という意味を持ちます。何か迷うことが生じたときに、その言葉を思い出してイエス様のみ跡に従おうということです。
・自分の思いではなく、神さまのみ心のままに。そのことこそが、肉の思いを捨てて神の霊に導かれるということなのかもしれません。なかなか難しいことです。いつもお祈りの中で、「み心がおこなわれますように」と祈りたいものです。

（7 月 11 日）「ローマの信徒への手紙 8：18～25」
わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。（ローマの信徒への手紙 8 章 24 節）

・今日読まれた箇所には、「希望」という言葉が多く出てきます。わたしたちは「希望」というと、何を思い浮かべるでしょうか。卒業するとき、新しい土地に行くとき、結婚するとき、様々な場面でわたしたちは「希望」を胸に抱きます。
・しかしパウロのいう「希望」とは、目に見えないものを指します。将来の姿や自分の状況は目に見えるし、想像できるでしょう。しかし聖書のいう「希望」がどのようなものかは、わたしたちには分からないのです。
・その「何だかよく分からないもの」に心を向け、待ち望む。雲をつかむような話かもしれませんが、イエス様に出会い、導かれたわたしたちには可能なのだと思います。希望を胸に、日々を過ごしましょう。

（7 月 20 日）「ローマの信徒への手紙 10：5～13」
では、何と言われているのだろうか。「御言葉はあなたの近くにあり、あなたの口、あなたの心にある。」これは、わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉なのです。
（ローマの信徒への手紙 10 章 8 節）

・旧約の時代、救いを得るためには、高いハードルを越えなければならないと考えられていました。日々の生活の中で安息日などの律法を順守するのはもちろんのこと、エルサレム神殿に年に三度行かなければならないなど。
・さらに様々な場面で献げるように定められた献げ物。それらをきちんとおこなっていくことは、大変難しいことだったでしょう。しかしイエス様が遣わされたことによって、「み言葉はあなたの近くにある」ようになったのです。
・わたしたちがそこに向かわなくても、イエス様の方から来てくださる。そして何度も心の扉をノックし、わたしたちがイエス様を迎え入れるのを待ち続けてくださる。神さまはすべての人に手を差し伸べてくださるのです。

（7 月 21 日）「ローマの信徒への手紙 10：14～21」
実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。
（ローマの信徒への手紙 10 章 17 節）

・パウロは前の箇所で、「主の名を呼び求める者は皆、救われる」と書きます。そしてここから、「主の名を呼び求める」には何が必要かを論証していきます。まず「主の名を呼び求める」には、「信じる」ことが必要です。
・さらに「信じる」ためには「聞くこと」が必要であり、「聞くこと」のためには「宣べ伝えられること」が必要だと説きます。つまりすべての前提には、「宣べ伝えること（宣教）」があるのです。
・すべての人がキリストの言葉を聞くことができるように、わたしたちは宣べ伝える者としてそれぞれの地に遣わされています。そこには牧師や信徒の区別はありません。良き知らせを伝える者として、歩んでいきましょう。

（7 月 12 日）「ローマの信徒への手紙 8：26～30」

神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。

（ローマの信徒への手紙 8 章 28 節）

・聖公会の礼拝では、成文祈祷を用います。成文祈祷とはあらかじめ文字にされた祈りの言葉を唱えることです。自由祈祷と対照的に使われる言葉です。そのため聖公会の信徒は、自分の言葉で祈るのが苦手な方が多いと言われます。（みんなではありません）

・祈るとき、何をどう祈っていいのか分からない、祈りの言葉がまったく口から出ない、そんなことはないでしょうか。そのようなときに、ふと頭の中に祈りの言葉が浮かぶことがあります。それがここでいう、「霊が祈りを助ける」ことなのかもしれません。

・この霊を「聖霊」だと捉えると、「助け主」、「弁護者」としての働きがここに書かれているように思います。成文祈祷に慣れていても、たまに自由に祈るのも聖霊の働きを感じられて、いいことだと思います。

（7 月 13 日）「ローマの信徒への手紙 8：31～39」

だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。

（ローマの信徒への手紙 8 章 35 節）

・「神が味方なら、誰がわたしたちに敵対できますか」と言い切るパウロの言葉に、ハッとさせられます。わたしたちは日々の生活の中で孤独を感じ、多くの人から責められているように感じることがあります。

・そのときにこそ、今日のパウロの言葉を思い出したいものです。神さまが味方なのです。神さまがわたしたちをとことん愛し、そしてイエス様を遣わされた。その事実がまずあるのです。

・そう考えたときに、わたしたちは何を恐れるのでしょうか。わたしたちを神さまから引き離すものはないというパウロの言葉は、まさに福音です。たとえわたしたち自身が離れていこうとしても、神さまはそれを拒むのではないでしょうか。

（7 月 18 日）「ローマの信徒への手紙 9：30～33」

なぜですか。イスラエルは、信仰によってではなく、行いによって達せられるかのように、考えたからです。彼らはつまずきの石につまずいたのです。

（ローマの信徒への手紙 9 章 32 節）

・マルコ福音書 6 章 1～6 節には、安息日に教えるイエス様に対して「この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか」と驚くナザレの人々の姿が描かれます。

・そしてその「思い込み」によって、ナザレの人々はつまずいたとあります。自分が信じている方向とは違う道を示されるとき、人はつまずくのです。そもそもユダヤの人たちは、自分の力だけで義に達することができると信じていました。

・それは実は、幻想だったのです。信仰によらないでは、わたしたちは誰一人として神さまの前で義でありえない。しかし今も多くの教会やクリスチャンは、その幻想を追い続けているようにも思えます。

（7 月 19 日）「ローマの信徒への手紙 10：1～4」

兄弟たち、わたしは彼らが救われることを心から願い、彼らのために神に祈っています。

（ローマの信徒への手紙 10 章 1 節）

・福音書に出てくるファリサイ派の人たちは、イエス様に対抗する「悪役」として描かれることが多いです。しかし彼らは熱心に神さまを求め、熱心に自分の義を建てようとしていた真面目な人たちでした。

・ただその根底が間違っているのだとパウロは指摘します。正しい知識に基づいていないから、彼らがいくら熱心であったとしてもダメだというのです。それでは正しい知識とは何なのでしょうか。

・イエス様は罪人や徴税人、娼婦や異邦人といった、人々から排除されていた人と一緒に食事をしました。「すべての人を救いに導きたい」、それが神さまの思いであり、すべての根っこにあるものです。それを見誤ってはいけないのです。

（7 月 14 日）「ローマの信徒への手紙 9：1～9」
彼らはイスラエルの民です。神の子としての身分、栄光、契約、律法、礼拝、約束は彼らのものです。
（ローマの信徒への手紙 9 章 4 節）

・「選民思想」という言葉があります。旧約聖書によれば、イスラエルの民（ユダヤ人）は神さまから選ばれ、約束の地を与えられたと読むことができます。また彼らは、救いの約束を得ていると考えていました。
・しかしパウロは、肉による子ども、つまり血統によって神の子となるのではなく、神さまの約束によって、一方的に選ばれるのだと書きます。自分たちが神の子であるという主張は、すべて自分勝手なものなのかもしれません。
・そう考えると、イスラエルとガザで起こっている争いのように、宗教が絡んでいる戦争にはまったく正当性がないといえます。神さまはすべての人を愛し、わたしたちに敵を愛しなさいと命じられるお方なのですから。

（7 月 15 日）「ローマの信徒への手紙 9：10～18」
従って、これは、人の意志や努力ではなく、神の憐れみによるものです。
（ローマの信徒への手紙 9 章 16 節）

・人を救いに導くのは、すべて神さまの自由意志であると言われるとどうでしょう。そうであれば別に努力しなくてもいい。悪いことしたって構わない。そう思いませんか。実際パウロの言葉を聞いて、放縦な生活を送った人たちもいたようです。
・しかし救いの根本には、神さまの憐れみがあるということを忘れてはならないと思います。たとえばお母さんが赤ちゃんを慈しむ姿を思い描いてみましょう。ほとんどのお母さんは赤ちゃんが何をしようとも、また何もしなかったとしても、全力で愛します。
・その愛を全身に受けて育った赤ちゃんは、少しずつ分かってきます。「ぼくはママに愛されている。だからママを喜ばせてあげたい」。神さまの愛をわたしたちは一方的に受けています。ではどう生きるべきなのでしょうか。

（7 月 16 日）「ローマの信徒への手紙 9：19～26」
神はわたしたちを憐れみの器として、ユダヤ人からだけでなく、異邦人の中からも召し出してくださいました。　（ローマの信徒への手紙 9 章 24 節）

・2019 年に、スカーレットという朝ドラが放映されました。もう 5 年前の放送ですのでうろ覚えですが、主人公は焼いた物の出来が悪かったら、地面に投げつけて割っていたような気がします。（違ったらごめんなさい）。
・では「憐れみの器」というものは、どういうものでしょうか。想像してみましょう。神さまは天地創造の際、「それは極めて良かった」と造られたものに満足されました。そこには人間も含まれていました。
・ところが罪を犯し、エデンの園を追われ、自分の力では神さまの前に立つことが出来なくなった人間は、神さまからみたら「失敗作」と言えます。しかし神さまはその器を割ることなく、大切にしてくださる。その憐れみの中で生かされている器でありたいものです。

（7 月 17 日）「ローマの信徒への手紙 9：27～29」
また、イザヤはイスラエルについて、叫んでいます。「たとえイスラエルの子らの数が海辺の砂のようであっても、残りの者が救われる。
（ローマの信徒への手紙 9 章 27 節）

・創世記 22 章には、イサクをささげよという主の言葉を守ろうとしたアブラハムに対して主の御使いが言った言葉が書かれています。「あなたを豊かに祝福し、あなたの子孫を天の星のように、海辺の砂のように増やそう」。（創 22：17）
・その言葉に対しパウロは、「たとえイスラエルの子らの数が海辺の砂のようであっても、残りの者が救われる」と叫んだ預言者イザヤの言葉を引用します。たとえ「血統」が良くても、救いの中に入れるとは限らないのです。
・しかし神さまは、ソドムやゴモラが一瞬にして滅ぼされたように、イスラエルの子らを滅ぼすことはなさいませんでした。当時の教会には異邦人だけではなく、ユダヤ人も含まれていたようです。神さまはすべてを滅ぼすのを思いとどまられていたのです。